博物館藏版

教草

第十四

青花紙一覧

凡そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣とし之を食して何たるを知らさるところ其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の發明なく國産を繁殖せしめて各其業に就く事を知らす故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむることは他日脩産の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に乗し各種職業の教草を編成せしめ画図を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まで昨八年七月の火災に罹りしにより今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補はしむと雖も其図の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならさるところあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡す所に非す此餘の如きは他日に譲る

明治九年二月

田中芳男記

第一 稲米	第二 糖製	第三 養蚕	第四 生糸	第五 樟虫
第六 野蚕	第七 葛布	第八 苧麻	第九 草綿	第十 纖緯草木
第十一 索麪	第十二 葛粉	第十三 藍	第十四 青花紙	第十五 製茶
第十六 烟草	第十七 漆	第十八 蒔繪	第十九 蠟	第廿 白柳
第廿一 疊表	第廿二 香蕈	第廿三 製紙	第廿四 蜂蜜	第廿五 油
第廿六 臙脂	第廿七 澱粉上	第廿八 澱粉下	第廿九 褐腐	第卅 豆腐

版權所有

教草 第十四

青花紙一覽

青花ハ鴨跖草の花なり鴨跖草ハ何國にも自生の夥しき物なれども近江國山田郷にて作る所のものハ一種大葉のものにて花弁の大さも常品に十倍す故に青花紙を製するにハ必是種を要するなり鴨跖草の種法ハ冬月向陽の地に下種して苗を生じ三月の末に至りて畑地へ移栽し培養す肥ハ人糞油渣等を用ゆ夏月土用前より花を開く野生の者に比すれバ格別大にして且美なり毎朝露を侵し花弁を摘采る紅花を摘むが如し此花を用ひて汁を絞りて紙に滲込たるもの即青花紙なり又ボウシ紙とも云

青花紙を製するにハ先づ花を採りて液と収むるなり花を搾るの法ハ花弁の生鮮なるものハ撰び取りて塵芥を去り竹篩にて雌雄蕊并黄粉を篩ひ除け桶に入れ壓板を載せ挑木をもつて木を以て壓すれバ青汁自らに流出づ桶の下に呑口を付け受るに盤を以てし他に漏さざらしむ

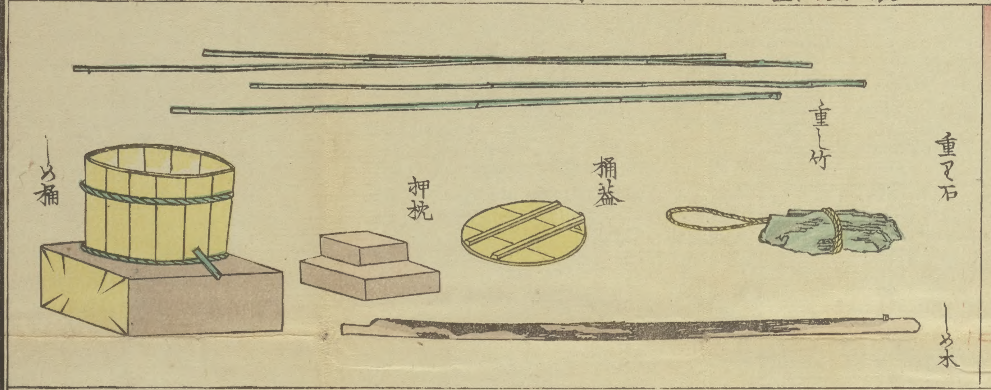
紙を染むるの法ハ美濃上有知村にて製する花口紙一帖四十八葉の紙を染臺の上に延べ刷毛を用ひて青汁を蘸し一帖をならべて刷き染むるなり紙の両角に些少の餘白を止め日光に曝し乾すなり白を止むるものハ乾上りたる後叠ぬる紙花液の為に粘合したるを引離すに便利ならしめんが為なり右の紙乾き上がるをバ此度一帖の紙を十二箇に分ち一箇四葉づゝ叠み置き再び青汁を以て刷き乾かし又其次ハ二葉づゝ叠み又前の如く青汁を刷き乾かし是より後ハ幾度刷きても皆二葉づゝ染むるなり一葉離て染むるにハあらず右の如くする都合五十度より六十度に至る始めて好き青花紙となるこれを二帖合して一束とす即九十六葉也四辺を剪揃へ箱に入て全き方物とす

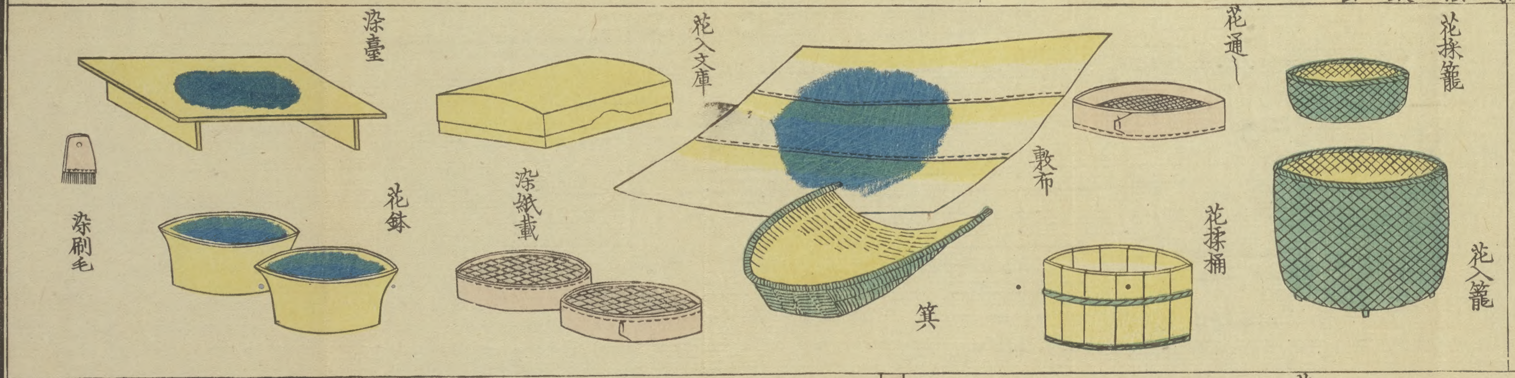
青花を作る村數凡五十箇村戸數凡三百五十軒慶應丁卯年産出三千二百七十帖價金一千五百四十九両一歩二朱明治辛未年産出千五百七十帖價金一千二百六十八両

青花ハ青を染むる品の内ニ於て別て鮮明なるものなれども惜むべきハ染上る後一度水に入れバ忽消滅して痕なし假令水より湿ハざるも月を經れバ色減じ久く保つ能ハざるなり夫故衣服摸様の下繪を画くにハ是非とも青花を要するなり其他菓子を染め燈籠を彩どるなど尤妙とす大に映して色黯せざれバなり青花紙用法ハ一葉の紙を入用だけ剪刀にて剪り取り碟子に入れ水を澆げバ乍ち青汁出づ或ハ些の米醋を加ふれバ尤能く色を發す且水を澆きて快く消散し毫も影子を止めざるなり

明治六年一月 山本章夫 撰
溝口月耕 画

博物局





男爵田中芳男氏寄贈
先代田中芳男男爵旧蔵書
昭和七年
B 63992